
fate/zero justice to justice

紅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a t e / z e r o j u s t i c e t o j u s t i c e

【Nコード】

N 5 6 1 6 Z

【作者名】

紅雷

【あらすじ】

魔術師同士が己の願いを叶えるために殺し合う戦い・・・それが聖杯戦争。60年に一度のそんな『お祭り』前に殺人鬼に殺されそうになった少女こと久城伽耶くじょうかやは死を覚悟した時、殺人鬼が作った魔法陣から赤毛の青年を呼び出す。その彼の名は『ネギ・スプリングフィールド』・・・親子続いて英雄と呼ばれた人間であった。

act・0 一筋の希望（前書き）

fateキャラがネギま世界に来るのはよくあるけれど、ネギがfate世界に来るのは少ないと思います。書いてみました。ただし、彼はマスターではなくサーヴァントです。触媒云々の設定に関しては一応考えています。とりあえず、今回は様子見です。

act・0 一筋の希望

> side・伽耶<

—— ああ、私もうすぐ死ぬんだ。

腰を抜かしてただ怯えることしかできない、肩までかかる髪と平凡な四角いメガネが特徴的な少女……久城伽耶は目の前の光景を見つめ真っ先にそう思考した。

部屋中には夥しい量の紅い雫によって発生している鉄の臭いが立ち籠めている。原因の元を辿ればそれは彼女の最愛の家族であり唯一の肉親である母親に他ならない。

つまり、伽耶の母親はもうこの世にはおらずいずれ朽ち果てる予定の抜け殻が体内を循環する赤い液体——血液を暴力的に抉られた腹部から垂れ流している状態なのだ。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよーっ、繰り返すつどに四度——あれ、五度だっけ？ えーっと、ただ満たされるトッキーをー、破却する……だよなあ？ うん！」

また、ソレ（……）を行なったのは古本を片手に服が血で汚れても気にせず意味不明な呪文めいた言葉を奇声を上げながら呟いている青年であり、現在冬木市で発生している無差別連続殺人の犯人……雨生龍之介であった。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよと、はい今度こそ五度ね。
オーケイ？イエスアーム、オーケイ！！」

龍之介は先程間違えた部分を再び読み直すと自問自答し興奮を露わにする。

伽耶はその姿を絶望を感じた虚ろな瞳で無言で見つめ、ただ刻一刻と迫る死を受け入れる準備を心の隅で考え始めた。

「ねーねーお嬢ちゃん、悪魔って本当にいると思うかい？」

—— 現実には「悪魔」という存在は間違いなくいないだろう。妖精とか天使とか神様だってきつといないに違いない。
なぜならば、この男が今まで殺してきた罪のない人間が誰一人として助かっていないのだから。

殉職したガタイの良い父親ならばこの程度のひよろつとした男など力業で倒して逮捕し、永遠に刑務所から出られないようにすることができるといふのにとことん自分はいっていない。

自分なりに母親を支えてきたつもりだったけれどこの状況ではもはや全てが台無しだ。このままでは身寄りのない自分は生きていても行く宛がない。死んでも死にきれない。

（・・・だけど、私の運を全て使ってもいい。この世が理不尽だけの世界ではないことを証明して欲しい）

こんな時に都合のいいヒーロー・・・（この際、顔とかの贅沢は言わない）が突然現れて自分を救ってくれたら、と恐らく叶わないだろう願いを私は祈った。

すると突然、右手の甲にまるで切り傷に消毒液をふりかけた時のような激しい痛みが走った。それは一瞬にして収まりはしたが本当に突然過ぎたので私の心臓の鼓動を急速に早めた。

（・・・何、これ。薔薇と茨みたいな・・・刺青？）

試しにゴシゴシと擦ってみるも垢を落とすように消える様子はない。正直、こんな状況でこんな微妙で不思議な現象に遭っても困ると思ったのだが、ふと吸い込まれるように自然と体が動いて青年がさつきから何かと呟いていた血の魔法陣の中へ入り込んだ。

そしてその瞬間、屋内だというのに尋常ではないほどの突風が吹き抜け眩い光が私の視界を支配した。反射的に顔を覆い光から目を守る。

「スゲー！！coolだぜこりゃ・・・この本、マジパネエ！！」

呟いていた呪文が無意味でなかったことに青年が興奮しているのが聞き取れるが、私が彼のその声を聞いたのはこれが最後であった。

なぜならば――

「・・・それは良かったね。ついでにと言っではなんだけれど――
――『ご褒美』だ」

「――ガハッ！！！」

聞き覚えのない第三者の声が聞こえると共に青年が殴られ壁へと叩きつけられ気絶したからだ。

警戒しながら恐る恐る覆っていた腕を退かすと、ローブを着た身の丈もある杖を持っている若い青年が立っていた。

彼は部屋を見渡し、この部屋で起きていた出来事を把握しようとしているようだった。

「・・・やれやれ、殺人現場に召喚されるとは思いもしなかったけどギリギリ間に合ったみたいだ」

偶然というか必然的に彼と目と目が合う・・・かなりのイケメンだ。また、その表情は非常に安堵してまるで見ているこちらさえ嬉しくなるように感じられた。

「立てるか、君？」

「は、はい・・・」

紅くなってしまった顔でドキドキしながら差し伸べられた手を握り私は立ち上がる。

そして問うた、「貴方は何者だれですか？」と——彼は問いにこ
う答えた。

「キャスターのサーヴァント、聖杯の寄る辺に従い参上しました。
問おう・・・あなたが僕のマスターですか？」

——絶望したまま死ぬはずだった私にこの夜、一筋の『希望』と
いう名の光が舞い込んだ。

a c t . 0 一筋の希望（後書き）

無触媒召喚ではないのであすからず。オリ主の久城伽耶は一応、ステイナイトの初期原案の女主人公みたいな容姿です。ちなみに中学生です。

細かい設定とかはのちのち更新します。

感想よろしくお願いいたします。

女オリ主&サーヴァントステータス紹介（前書き）

色々と設定の修正を行いました。が、これでもまだ削ったほうがいい
という場合は一言お願いします。

女オリ主&サーヴァントステータス紹介

<主人公>

くじょうかや
久城伽耶

> i 3 7 3 7 9 — 3 0 0 6 <

魔術回路：3 2 本 魔力：並（そんなには多くない）

属性：地・水 戦闘方法：植物の武器化（例：薔薇↓鞭）

14歳の主人公。中学生でクラスでは委員長をやっているほど真面目な性格だが何処か弱々しい正確の持ち主。考え事をよくして時々自分の世界に入り込んでしまうこともある。

父は刑事であつたが中学に上がる前に事件で殉職してしまつたため母親と二人暮らしであつた。また、彼女の祖父もほぼ同じ頃に病気で亡くなっているので身寄りにはほばいないに等しかつた。

しかし、雨生龍之介によつて最愛の母が殺されてしまい生き残つても死んでも不幸であることには変わらない状況に追い込まれてしまふ。死を覚悟しつつも救いを何処かに求めていた彼女は最後の奇跡を願つて祈ると、突如として令呪を発現させることとなつた。そして、何かに導かれるように母の血で描かれた魔法陣の中へ入るとキヤスターのサーヴァントこと・・・『ネギ・スプリングフィールド』を召喚することになった。

元々、彼女の家は『九条』と呼ばれる魔術師の家系であり自然に存在するモノ・・・彼女の属性に現れている『地』と『水』などを扱う一族であった。父親も一応は魔術師であったが才能が乏しかったためほとんど魔術を行使したことはなかったという。

また、彼女は祖父と父から秘密裏に魔術刻印の移植を受けていて、お守りと称して『壊れた懐中時計』のようなものを渡されている。

<サーヴァント>

■クラス：キャスター

■マスター：久城伽耶

■真名：ネギ・スプリングフィールド

属性：混沌・善

筋力：B 耐久：B

敏捷：B 魔力：EX↓A（マスターにより低下）

幸運：C 宝具：A++

■スキル：

カリスマ：B

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。Bランクであれば国を率いるに十分な度量。元々、英雄の息子として注目されていたが魔法世界を救ったことによりさらにそのカリスマ性が上昇した。（実際、ウェスペルティア王国の王として活動していたこともある）

心眼（真）：B

修練と鍛錬によって得た洞察力。危地にあつて冷静に活路を見いだす戦闘論理。

幾度となく戦い続けたネギにの天才性が発揮される。

陣地作成：B

「魔術師」クラス特性。

魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成可能。

道具作成：C

「魔術師」クラス特性。

魔力を帯びた器具を作成可能。

対魔力：B

魔術詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術・儀礼呪法などを以ってしても、傷つけるのは難しい。

直感：D

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を「感じ取る」能力。

自己魔力生成：C

マスターに負担をかけることなく魔力を生成できる能力。単独行動に近い性能を持つ。

精霊魔法：B

精霊に働きかけて魔力を行使する技法。魔術とさほど変わりはない。

■ 宝具

闇の魔法：マギア・エレベアA++ 対人・軍宝具 最大捕捉 1～????

直前に唱えた呪文を手元に留め、肉体に取り込み自らの霊体と融合させる闇の魔法。

取り込む呪文によって様々な能力が肉体に付加される。治療から攻撃まで幅広い。

千の絆：ミッレ・ヴァインクラE/A+ ??? 最大捕捉 1～????

形状は小さな革のパスケース。差込口に自分の従者の契約カードを差し込んで呼び出すと、そのカードのアーティファクトを自分で使

うことができる。契約相手のアーティファクトの特性も完全に再現可能。他人に貸し与えることも可能。偵察から決戦兵器まで数多く揃えられているため、ほぼ全てのクラスの特性を持っていることになる。（IF設定によりネギま28巻においてのテオドラとの仮契約破棄は完全なる世界との戦いのことも考えてしなかったことになっている。ただし、その後の展開はほぼ同一である。）

太陰道：たいいんどうB

対人宝具 最大捕捉 1～10人

気弾・呪文に拘らず敵の力を我が物とする闇の魔法の進化形究極闘法。展開には数十秒ほど必要だがその効果は絶大である。

キヤスターのサーヴァントとして召喚された英霊だが、実際は死んでいないため（ある年齢を境に不老になり、闇の魔法に完全覚醒した時に不死化した）、セイバーと似たような状況に置かれている。（つまり、霊体化ができないということ）

彼の正体は、ネギまの世界にて親子二代に続き英雄となった青年（元・少年）である『ネギ・スプリングフィールド』。原作から数十年ほど経っており（容姿は大人ネギ）、魔法世界のための火星緑化プロジェクトがまだ進んでいる状況で明日菜は未だ礎として眠っている。教師としての修行が完了後にウェスペルタイア王国をMM元老院穏健派やアリアドネー、ヘラス帝国の協力の下で再建し、魔法世界救済計画を本格的に実行に移した。

f a t e世界の魔術知識をとある事情で知っており、その際に巻き

込まれたトラブルが後に伽耶に召喚されるきつかけをつくった。聖
杯には『■■■の役目からの解放』の願いがある。（本人曰く、た
だの我侭に過ぎないという）詳しい経緯はのちのち解説予定。

女オリ主&サーヴァントステータス紹介（後書き）

主人公の能力は幽遊白書の蔵馬のローズウィップみたいな奴を想像してください。

あくまで例ですので必ず登場するとは限りません。

次回も短いですがお付き合いよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5616z/>

fate/zero justice to justice

2011年12月19日14時46分発行